

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-28

特集私たちのみた世界：アジアのプロファイル：4. 黄浦江（ホワンプーチャン）のほとり：上海（シヤンハイ）

青木, 千枝子

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

59

(発行年 / Year)

1967-03-21

はかつてはブロードウェイマンションと呼ばれ、日本の東亜研究所もあつたというが、現在は上海大塚と呼ばれる。その裏に続く練瓦だての町なみが日本人になじみ深い虹口である。橋の手前の中山東路にはかつて外国人経営の商社がならんだ地域である。しかし現在はこれらの建物は、上海市人民委員会、海島クラブなどに変わっている。私たちの宿泊した和平飯店は20世紀の始め英国人によつて建設されたキヤセイホテルであつた。そして、外国船のむらがつた河面は、現在赤い星をへさきに着けた船が行き交う。

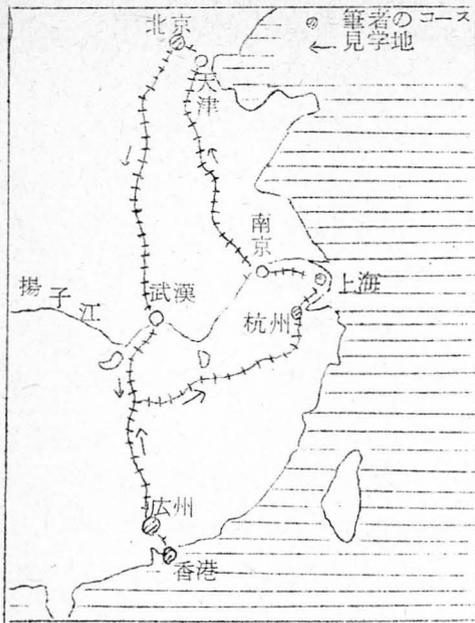
中山東路に丁字型に交る南京路は、東京ならば銀座通りとでもいうべき商店街である。ここにも高層ビルが立ちならぶ。友誼商店、オ一百貨店、新華書店と、その他衣類、靴などの日用品から、書、すずり、美術品などの商店までであるが、そのほとんどが国営である。この南京路が中央部で西藏路と交差する西角に人民公園がある。これはかつてトバクで有名な上海競馬場であり、時計台のある建物は上海図書館となつている。西藏路を南進すれば、かつての歡樂地大世界に至る。現在は健全娯楽のセンターだ。南京路を中心とするいわゆる繁華街の印象は、建物から見れば、戦前の銀座とでもいえようか。現在の東京、香港、バンコクなどに見られる無国籍な四角いビルではなしに、それぞれが高い塔や、三角の屋根をもち、色も冷たい白や灰色ではなく、茶や黄色みがかつた暖色が多い。以前の上海を知る人は、建物そのものはほとんど変化していないという。その古めかしい洋風建築が、かえつて重みを加え、現在の軽薄な植民地型都市には見られないふんい気を感じさせる。だが、これらの壁には鮮やかな赤地に白で、大きく高拳毛沢東思想、文化大革命万才、などのスローガンが挙げられている。それがこの古めかしい洋風建築とけして不調和ではないのだ。それはなぜだろうか。

上海の町は、いわゆる都市の概念をくつがえす町であり、その意味で最も新しい都市なのではあるまいか。かつての都市が、農村からの脱出者により建設された自由市か、また農村の支配者により建設された政治都市、産業都市として発生したのに対し、ここは農村に直結した性格を持つのではあるまいか。中国における印象の驚きの一つともいえるのは、どこに住む人間も同じ顔という点である。その意味で、いわゆる都会風という人間は少ない。これは最初にいつた素朴な農民の顔という印象に象徴されよう。それは日本人、とくに都会に住む日本人から見れば、あまりにもやぼつたくて見てはられない人達という事になろう。しかし、それが中国の特徴なのである。逆に中国人の語る東京の印象は、「かつての上海のようだ」の一語につきる。退廃と表面上の繁榮に満ちたけばけばしさ、そのかげにひそむ欧米崇拜と模倣によるにせの文化生活。それらが独立国という名の国に存在する新しい植民地型の都市。Tokio。それは30年前「上海ブルース」に歌われた上海そのままだということになる。この歌と最近の流行歌「二人だけの銀座」とのおそろべき共通性。知らぬ間に侵されている植民地文化に今さらのように気づくのだ。

新しい上海に住む人々の生活の一端をうかがってみよう。現在のこの町は極端にいうなら夜はない。なぜなら各工場は1日3交代制であり、通勤用の自転車、工場のトラック、またバスなども夜半過ぎにも走っている。夜半休むのは黄浦江の渡船。さらにむし暑い夏の夜は河岸は夕涼みの人々で12時すぎまでにぎわう。朝は日の出前から農民の野菜車が町を歩き、太陽が昇る頃には町のあちこちで民兵訓練が始まり、子供や老人は河岸や公園に集ってくる。日中の上海、それはこの町がまさしく800万の人口を持つ大都会である事を認識させるに十分なほど町に人が集る。南京路の歩道はゆつたりとした人波。デパート、商店に買物客も多い。だが何といても客の多いのは書店である。熱心に棚から書籍をおろしてはページをくつて調べている。中国で安い物は食料品と書籍。比較するのには少々無理があるかも知れないが、買い集めた書籍を北京で郵送したところ、5Kgの包が何と6個あり、この代金は約100元(15,000円)いかに安いか。日中の人通りの多さは、3交代勤務の明け番の労働者という存在を考えに入れないと、不審に思えるかも知れない。

これらの人々は南京路の裏側などにある旧村と称する御瓦づみの家に住む他、旧市の外側に開けた地域の新村と称する日本の団地に相当するアパートに住んでいる。ある新村をたづねてみると、バス通りに面する建物は一階が商店となつているゲタパキ住宅、ある一軒の家を訪問する。主人は61才で当年4月に紡績工場を定年退職し、妻と息子の3人暮らし、一家の総収入140円(約2.1万円)部屋は3間あり、台所は2軒共同。それで家賃は9円30銭(1395円)1ヶ月の生活費は1人13~14円(2000円前後)。まさにうらやましい限りである。私たちの通されたのは、ベットとダンス、本箱が並び、さつぱりとした南向きの部屋で、前面にベランダがついているのも日本の団地風である。このようなアパートの型式は今や全世界的なものであるらしい。体格の良い主人と、半白の髪をしたにこやかな主婦。日本流に言えば良いご隠居夫妻なのだが、この夫婦の生きた時代のきびしさ、兵火にじゅうりんされた上海の町。劣悪な条件のもとでの労働。そしてたどりついた老後の生活は、かつて想像も出来ない形で表われたのである。現在の喜びと過去の苦しみ、主人は青年に語りかけるのを老後の仕事としている。ダンスの上に時計と並べてししゅうで出来た毛沢東の肖像と、本箱に並んだ毛沢東選集が、この老人のすべてを語っている。これが、現在の中国における老後の生活なのである。老後の安定を求めてあくせくしている自分たちが、この時ほどじめじめに感じた事はない。しかし、この生活を手にするには、多くの同胞の血が流されていることを忘れさせまいとする老人のキラキラ光る眼。

市街西方の華東師範大学を訪れば、そこは一大緑地帯で、校内に川が流れ、数カ所にわかれた運動場と農園をもつ。校舎の建坪は15万 m^2 。しかし教師934名。学生4129名。これらの学生は全寮制。授業料・寮費は国家負担、その上貧しい学生には学校から書籍費が出るなど、日本から見るとこれもうらやましい事ばかり。学生数人との対話。暑中休暇とはいえ文化大革命に参加し



中国旅行のコース

て学習中とのこと、そして将来については国家の要請に従うとだれもがいう。校庭の木陰に椅子を持出して毛沢東語録を読む学生たち、今思えば彼らこそ紅衛兵なのだ。しかし彼らは明かるく無邪気で親切な若者たちで、私たちを歓迎して芝生で歌をうたつてくれる。「大海に行くには舵手にたよる」私たちと肩を組みあつて「東京—北京」夕暮れの校庭いっばいにその歌声はひびく。記念にその一人からもらった赤い毛沢東のバッジ、それは写真でみる紅衛兵のつけているものと同じであつた。

中国の誇る大型水圧プレス機をもつ工場で、水平クレーンをあやつる女性労働者。現場の責任者らしいひきしまつた表情をした労働者。作業衣の若者。6,000人の労働者中、女性は1,000人。重工業への女性の進出が著しい。勿論男女の賃金は同じ、

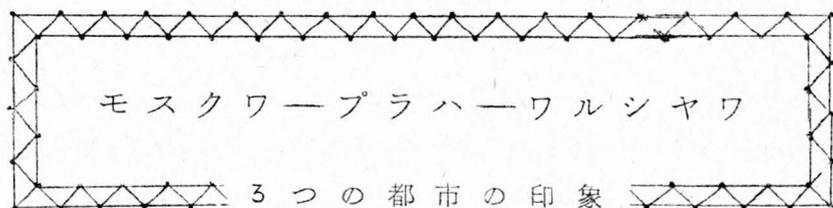
最高120元(18,000円)、最低40元(6,000円)と賃金格差は少ない。しかしこのような工場では最少年令18才で他の軽工業よりも年令は高い。この工場主催の昼食会では、毛沢東思想の学習状態を聞かせてもらえた。毛沢東思想の学習とは、矛盾論の考え方を実際に応用する、つまり人間の思考の論理構成にある。これを知る事が出来たのは実に楽しかつた。そして、このような思考体系を理解することによつて、今まである距離をたえず感じさせられていた中国人との対話が、よりスムーズになつて行つたのである。

少年文化宮、それは少年たちの校外におけるサークル活動の場であり、科学、文化両面の教育活動を行なつている。ここでは客一人に一人の案内役の少年少女がつく。私についたのは小学4年生の应ちゃんという女の子。耳の横で髪をビニールのひもで結んだ、大変おとなしい少女だつたが、革命の犠牲になつた女性烈士刘胡蘭^{リウ・ラン}の像の前に立ち、眼を輝やかせて、こうなりたいと叫んだ。そして講堂でくりひろげられた歓迎の学芸会。出しものは、チベット民謡風なメロディーをもつ「毛主席よいつまでもお元気で」行進曲風の「毛主席は父母よりも親わしい」「大海に行くには舵手にたよる」「私たちは王杰の銃をになう」またベトナム支援の子供万才。簡単な衣装をつけての踊りや、表演唱とよばれる動作をしながらの歌などを果敢に演じてくれる。講堂にあふれるばかりの子供たちにはさまつて、小さな椅子に座つて見ていると、幼い日の学芸会が目に浮ぶ。私の幼い日。日中戦争たけなわの時代。あの悲憤感をもつた戦争劇と、ころして見ている舞台とは、一致した方

向にすべてが進むという面では同様に見えながら、その内容は全く違うものだという事に気づく。子供たちの明るさと、元気さ、そこには悲愴感などみじんもない。あるのは祖國建設の意欲だけ、あの日本の戦争歌曲の哀愁を帯びたメロディーとこの行進曲の違い。民族楽器の音がみごとに行進曲につて流れる。

黄浦江のほとり。夕暮れがせまる、再び対岸がかすみ出す、長い影をひいてバスが走る。しかし、この夜のない隣町上海は、活気にみちた空気をそのままに明日へつなごうとしている。子供たちは公園や街路にむらがり、私たちを見上げています。これも朝と同じだ。中国とは、上海とは、それは偉大な農村なのだ。たとえ、植民地時代の洋風建築をそのまま残していようとも、この町の主人公である人々は、土の匂いを忘れ去った都会人のひ弱さを少しも持たず、連続する明日にむかつて歩いて行く農民のねばり強さをもちつづけている。この人々のもつ力が、上海を生れかわらせたのではなからうか。

青木千枝子



1965年8月から10月にかけて、僕は法政大学から出張を命ぜられ、チエコスロバキアで開かれた国際地理学会の小委員会に出席しました。往復にはソ連・ポーランドを通過しました。編集部でこれについて何か書きなさい、とのことです。海外旅行ブームとはいえ、これらの國ぐにへの旅行は、まだ珍しい段階なので、私に執筆依頼があつたのだらうと思います。求められるままに気のついたことを書きましよう。

1. "Travel is Trouble" 風俗習慣のちがいは申すにおよばず、私の行つた3國はレッキとした社会主義の本家本元なので、この体制上のちがいがどう感じられるのだらうか？ いろいろな紀行文が刊行されており、ちよつと読んでだけでも、ソ連的ビューロークラシーのこきおろし、ホテルの不便さと不親切さ、ひどいのは、それらの先入観がピタリとあたつていたので自讃するありさま。こんなのを読んでみると、まさに艱行苦行のために社会主義國にゆくような感じさえる。そうでなければ逆にベタほめの文書。これは自分で見て体験するよりしようがないと思うようになった。まあ、何とかなるだらう……。トラブルのオ1号は出発直前にやつて来